

言語の多様性と第二言語習得

樋 上 勲

20世紀半ば頃からアメリカの言語学者チョムスキーは、「人間に固有な言語能力は脳の生得的な資質に由来する」と主張して半世紀にわたって、言語学のみならず哲学や心理学の分野においても大きな影響を与えてきた。チョムスキーは言語使用者が有している言語についての知識である言語能力 (linguistic competence) と具体的な場面における実際の言語の使用である言語運用 (linguistic performance) とを区別したが、チョムスキーが研究の対象にしたのは、全く同質的な言語社会における理想上の話者・聴者の言語能力であって、話し始めの言い違いや、規則からの逸脱、発話の途中での変更など、異質なものを含んだ言語社会の言語能力とは異なったものである。

本稿では、多様な人々が社会で実際に使用する言語運用に視点を置き、言語の多様性を考察するとともに第二言語習得との関連にも触れてみたいと思う。

I 階級的差異と容認可能性

端的に言うと、文法とは規則の体系であるが、チョムスキーは文法を次のように定義している。

Grammar is a device that generates all of the grammatical sequences and none of the ungrammatical ones.

このように生成文法では、文法的な文のみを生成する装置を文法と定義し、基底構造と表層構造とを設けて、深層構造ともいわれる基底構造から文が生成されるとした。また、言語の実際的な使用である言語運用と言語の知識である言語能力とに区分し、言語能力の分析を研究の対象としている。

ある表現が「文法的」であるかどうかは、しばしば意見が分かれる場合があるが、言語使用者あるいは地域社会においてその表現が容認可能かどうかに関わってくる。生成文法においては、文法性は言語能力に関わる概

念であり容認可能性は言語運用に関わる概念である。

多様な人々が社会で実際に使用する言語運用には異質なものを含んだ変化に富んだ表現が多く見られる。ピジン語やクレオール語はいうまでもなく、英語を母語とする人々の間においても、一見、文法的でないと思われる変異な表現がある。

まず基本的な英語表現から見てみよう。学校文法で学習する「三単現」(三人称・単数・現在)は動詞に **s** または **es** をつける基本的な規則であるが、英語を母語とする人々の中には、次の例のように「三単現」の **s** または **es** をつけない非標準的な表現を用いる階層がある。

- (1) She like him very much.
- (2) He don't know a lot, do he?
- (3) It go ever so fast.

これらの例は Trudgill (1974, p. 43) によるものであるが、トラッドギルは三単現の **-s** のつかない比率について、英国アングリア地方のノリッジの住民と米国デトロイトの黒人層における言語調査の結果、階級の間に差異があることを、下記の表にまとめている。

Norwich		Detroit	
MMC (中流中産階級)	0%	UMC (上流中産階級)	1%
LMC (下流中産階級)	2	LMC (下流中産階級)	10
UWC (上流労働者階級)	70	UWC (上流労働者階級)	57
MWC (中流労働者階級)	87	LWC (下流労働者階級)	71
LWC (下流労働者階級)	97		

この調査によると、三単現の **-s** のつかない比率には、いずれの都市においても、中産階級と労働者階級の間に大きな差があることが分かる。

労働者階級のことばといえば、ロンドンの **Cockney** が思い出される。本来、コックニーというのは、ロンドンの中心にある **Bow Church** の鐘 (**Bow bells**) が聞こえる市内東部地域に生まれ育った人が生粋のロンドンっ

子と言われ、その英語は **h** のないところに **h** の発音をし、**h** のあるところを落としたり、また [ei] を [ai] と発音したりする特徴がある。Alan Booth (1988) によると、部外者であるがアメリカの小説家 Herman Melville はコックニーのことばを次のように正確に描写している。

Betty, my dear, says I, you looks charmin' this mornin'; give me a nice rasher of bacon and h'eggs, Betty, my love; and I wants a pint of h'ale . . .

上の英文を標準英語に直す必要もないが、語尾の **g** を省いたり、**says** や **looks** のように一人称や二人称にも **-s** が現われたり、**h'eggs** や **h'ale** のように **h'** が現われたりするのもコックニーの特徴である。

Cockney という語は本来、'a cock's egg' (価値のないもの) を意味し、16世紀頃には宮廷外のすべてのロンドンっ子のことばで、あらゆる身分の人々によって話されていたが、市とロンドンの西部地域 (West End) が富裕階級の住宅地として発展するにつれて多くの労働者階級はロンドンの東部の郊外に追いやられ、地方からきた貧しい人々と合流することとなり、現代では、コックニーはロンドン東部の労働者階級のことばを意味するようになった。

これまで異質と思われる幾つかの例を挙げてきたが、これらの表現はそれぞれの地域社会では容認可能な表現と見なされているのである。

II 地域的差異と方言

どの言語にも地域に特有の訛りの発音 (accent) があり、また方言と呼ばれているものがあるが、イギリスにも地理的な幾つかの方言がある。歴史的に概観すると Old English (450~1100) の時代にはアングロサクソン七王国 (The Heptarchy) として知られている Wessex, Sussex, Essex, Kent, East Anglia, Mercia, Northumbria の王国があり、主な方言として Northumbrian, Mercian, West Saxson, Kentish の方言があった。Middle English (1100~1450) の時代には主な方言として Northern, East Midland, West Midland, Southern の方言があり発音や語彙や語尾変化の点において互いに異なっていた。これらの方言のうち East Midland の方言が重要になり始め、14世紀末までに East Midland 方言が標準英語 (Standard English) となった。中世英語の末期に William Caxton が印刷術を

イギリスに導入し、ロンドンで書物の印刷を始めたが、その際 London Standard と呼ばれるロンドンの標準的な方言が用いられ、その方言が標準的な英語となり、今日に及んでいる。

実は、West Midland の Birmingham にかつて筆者が滞在中に、訛りのある英語を時々耳にしたが、後日、Wakelin (1977, p. 168) で、下記の記事を読んでなるほどと思った。

In a paper read in April, 1970, by Mr Howard Giles of Bristol University, it was reported that 177 pupils in comprehensive schools in Wales and Somerset, aged 12-17, and balanced in terms of sex and social class, were asked to assess tape-recorded local accents in terms of pleasantness of sound, status and the degree of comfort felt in the presence of each speaker. Out of the thirteen different types, 'BBC English' was placed top on all three counts, while a Birmingham accent was given the lowest rating for status.

これらの地域的な方言の他に、アイルランドやウェールズやスコットランドの英語があるが、いずれも容認発音 (RP=Received Pronunciation) とは異なったものである。特にスコットランドの英語は、Hughes & Trudgill (1979, p. 70) で、"The vowel systems of Scottish English accents are radically different from those of England, . . ." といっているように、非常に理解しにくい英語である。筆者は、かつてエディンバラの城内でサマーフェスティバルの軍楽隊パレード (tattoo) を観賞したのち、近くのパブに入って地域の人々と会話と楽しもうと思ったが、十分に理解できなくて苦い経験をしたことがある。

アメリカ合衆国の英語は、一般に、Northern と Midland と Southern の三つの方言に分類されるが、本稿ではニューイングランド地方と南部を除く地域の人たちに話される General American をアメリカ英語と呼び、標準的な英語をイギリス英語と呼ぶことにする。

III 言語間の差異

アメリカ英語とイギリス英語との間には語法上多くの差異がある。アメリカ人とイギリス人が話し合ったときには、誤解が生じることがあるといわれている。次の例は Moss (1973) の Introduction からの抜粋である。

... I watched some Anglo-American misunderstanding caused by words having different meanings. Like the time I heard an American student at Cambridge University telling some English friends how he climbed over a locked gate to get into his college and tore his pants, and one of them asked in confusion. 'But how could you tear your pants without tearing your trousers?'

これは、**pants** という語の意味が英語と米語の間に差異があるため生じた面白い例であるが、両国語には多くの用法において違いがある。Norman Moss は小著ながら副題が示す通り、両国語の差異を、英・米両方の視点から説明している。

また、Henry Alexander (1962) は英語と米語の差異について *Pronunciation, Forms and Syntax* と *Differences in Vocabulary* の二つの章を設けて詳述している。

adult, often, schedule のような単語については、両国語間に発音の違いがあることはよく知られているが、話題や対話者に応じて発音を変えることを、Crystal (2004, p. 474) は著者自身の例として次のように述べている。

Random variation exists, with language users pulled in different directions at once. I am a case in point: I currently pronounce the word *schedule* both with and without a [k] consonant. I am traditionally a 'shedule' user, but quite often say 'skedule', influenced partly by the content of what I am saying (American subject-matter might trigger it), by the need to accommodate to the accent of my interlocutor (my children are all [k] users), and, often, for no apparent reason other than the whim of the moment.

上の例は **code switching** と言われる類で、場面や状況に応じて他の言語に切り替える場合である。

英語と米語の差異についての例は枚挙に暇がないほどであるが、次の例も参考になる。

(4) BE: The girl dived off the pavement into the river.

AE: The girl dove off of the sidewalk into the river.

この他に、カナダの英語や、オーストラリアやニュージーランドの英語などがある。カナダの英語はアメリカ人

にはイギリス的に響くようである。例えば、**faucet** の意味に **tap** を、**suspenders** の意味に **braces** を用いるからである。また、カナダの英語はイギリス人にはアメリカ的に聞こえると言われている。例えば、**petrol** の意味に **gas** を、**spanner** の意味に **wrench** を用いるからである。

ある調査によると、カナダ人の75%強が、**schedule, tomato, missile** の単語について、それぞれアメリカ式発音 ([skédʒul], [təméitou], [mísil]) で話し、58%が、**progress, new** の単語についてイギリス式発音 ([próugres], [nju:ɪ]) で話すということである。

IV 個人的差異

個人の言語は **idiolect** とも呼ばれるもので文体と大いに関わりがある。話し手は聞き手との関係や発話の場の状況によって文体を変える傾向にある。Joos (1961) を参考にして発話の文体を考えてみよう。Martin Joos は **style** を **frozen, formal, consultative, casual, intimate** の5段階に区分している。**frozen speech** は文字通り凍結された発話で昔の偉大な作家の文体である。例えばシェークスピアが書いたように話す場合の文体である。**formal speech** は講演会や大学の講義で話す形式だった話し方であり、**consultative speech** は5、6人の小人数で諸問題を話し合う会議で用いる文体である。**casual style** は友人同志で使う、くだけた話しことばである。俗語 (**slang**) を用いるのが特徴である。**intimate speech** は夫婦や家族の間で話されることばで、省略や簡略化された表現が特徴である。使われる単語の意味も **consultative style** では、協制的な意味が多く、他の文体では、私的な意味や俗語的な意味、また専門的な意味や暗示的な意味が必然的に加わることを Martin Joos は、次のように説明している。

The meanings of any word which occurs at all in consultative style are basically its consultative meanings, to which each other style adds specific meanings in intimate style, slang meanings in casual style, technical meanings in formal style, allusive meanings in frozen style.

どのような言語表現もそれが用いられる場面と密接な関係がある。話しことばであっても書きことばであっても、場面はことばの意味の理解に欠かせないものであり、場面がなければことばは意味をなさないものになる。**air, house, line** のような簡単な単語も文脈によつ

て異なった意味を有することになる。例えば、次の例をみてみよう。

(5) **I was looking at the wrong line.**

上の文は単独では意味があいまいである。適切な場の脈絡があれば、話し手の見ていたものが本であるのか、詩であるのか、また図表であるのか鉄道であるのか、あるいは軍団であるのか理解されるのである。

また、ある場面または事象を知覚あるいは認知してそれを言語化するとき、意識的あるいは無意識的に、語彙の面においても統語面においても選択が行なわれている。例えば、ある大学の語学の講座 (LING 100) の受講を認可する場面の表現形式は次のような文が考えられる。

- (6) a. **I allow NP to take LING 100.**
 b. **NP is allowed to take LING 100.**
 c. **I permit NP to take LING 100.**
 d. **I grant NP permission to take LING 100.**
 e. **I give NP permission to take LING 100.**
 f. **NP has my permission to take LING 100.**
 g. **I authorize NP to take LING 100.**
 h. **NP is authorized to take LING 100.**
 i. **NP may take LING 100.**
 j. **I'd like to authorize NP to take LING 100.**

NPには個人名が入るが、takeの代わりにenroll inや他の類似語を用いると更に多くの表現形が生じることになる。

個人の言語は言語使用域 (register) に関わりがあり、文化的職業的な環境の影響を受ける。Leech (1974, p. 17) が文体的意味の例として挙げている次の例文を見てみよう。

- (7) a. **They chucked a stone at the cops, and then did a bunk with the loot.**
 b. **After casting a stone at the police, they absconded with the money.**

上の例は言語使用の社会的環境に応じて意味が伝達される場合で、「警官に石を投げて、お金を持って逃げた」ことを述べているが、aは犯人仲間が使うような表現であり、bは警部が公的な報告をする際に用いるような表現である。このように話し手あるいは書き手の職業や地位や立場などの社会的環境によって語彙の選択や構文上の差異が生じるのである。

V 言語相対性の原理

社会的経験と言語表現との間には密接な関係があり、言語表現が社会的環境の影響を受ける例として色彩語が挙げられる。日本語でも英語でも焦点色である白色を表す形容詞は「白い」や 'white' であるが、エスキモー人は白色の色合いや度合いによって言語的に区別する。これは彼らが様々な種類の雪を区別する生活上の必要性から生じたものである。私たちは、降っている雪も、積もった雪も、固まった雪も、解け始めた雪も、風に吹かれて舞う雪も、すべて場面に関係なく「雪」(snow) というが、エスキモー人は、これらの様々な雪にそれぞれ異なった単語を使い、私たちが用いる包括的な語は想像できないのである。Edward Sapir は、「現実の世界」は所属する社会の言語習慣に基づいて無意識的に構築されることを次のように述べている。

It is quite an illusion to imagine that one adjusts to reality essentially without the use of language and that language is merely an incidental means of communication or reflection. The fact of the matter is that the 'real world' is to a large extent unconsciously built up on the language habits of the group. No two languages are ever sufficiently similar to be considered as representing the same social reality. (Mandelbaum 1949, p. 162)

人は言語を用いて現実世界に順応しているのであり、言語は単なる伝達の手段のみではなく人の世界観にも影響を及ぼすということである。同様なことを Benjamin Lee Whorf も次のように述べている。

It was found that the background linguistic system (in other words, the grammar) of each language is not merely a reproducing instrument for voicing ideas but rather is itself the shaper of ideas, the program and guide for the individual's mental activity, for his analysis of impressions, for his synthesis of his mental stock in trade. . . . We dissect nature along lines laid down by our native languages. (Whorf 1956, pp. 212, 213)

このように思考は言語に依存し、言語範疇はその言語の話者の認識に影響を及ぼすという考えは、今日では、サピア・ウォーフの仮説として一般に知られている。思考が言語体系の影響を受けるとしても、統語レベルの影響

響を受けるかどうかは断定しがたいが、少なくとも語のレベルでは、言語カテゴリーが認知活動に影響を与え、認知活動を制限すると思われる。

VI 表現の多様性と第二言語習得

これまで言語表現の多様性を言語運用の面から考察してきた。第一言語習得の場合と同様に、第二言語習得の場合も、言語能力と言語運用の接点について分析することは容易ではないが、拙稿(2005)で論述したように、第二言語習得においても核心文法を中心とした言語習得装置(LAD)が作用し、認知的・知覚的発達過程に言語経験と社会経験が加わって伝達能力が習得されると考えられる。

第二言語習得が、海外出張や留学などの長期にわたる滞在のもとで行なわれる場合は、それぞれの言語圏や地域社会の自然な環境の中で、その社会や地域に特有な表現を始め、様々な言語運用に接しながら伝達能力が習得されることになる。

第二言語は、通常、第一言語を習得した後に習得されるので、習得の程度は、学習者の母語や知的発達段階や習得開始時期、学習環境等の社会的状況によって異なり、表現能力にも差異が生じる。学習者の言語には、知的発達段階や学習過程に応じて、中間言語と呼ばれる段階があり、そこには、発音、綴り、語彙、語順、時制などの誤りが見られるが、誤りの原因として、Richards(1971)は、①干渉による誤り②言語内的誤り③発達上の誤りの三種に分類している。①は母語の干渉によって生じる誤りであり、②は規則の不完全な適用によって生じる誤りで、過剰一般化や規則適用条件の認識不足による間違いなどである。③は間違っただけの仮説設定による誤りである。誤答例は割愛するが、Richardsは三種の誤答のうち、干渉によらない言語内的誤りと発達上の誤りに焦点をあわせて体系的に分類している。ある調査によると、母語の干渉による誤りは、非干渉の誤りに比べて少なく音韻レベルにおいても統語レベルにおいても、全体の約30%であるが、いずれの誤答分析も学習困難点の予測や教材の作成などについて多くの示唆を与えてくれる。

第二言語習得が自然な環境ではなく、教室のような特殊な環境で行なわれる場合には、効率的な習得が行なわれるように、教材や指導法などに工夫を凝らす必要がある。

多様な言語表現の中で、何をどのように指導するか

は、E. S. P. (=English for Specific Purposes)と関わってくる。観光英語か、商業英語か、あるいは教養英語か、その他、目的に応じた英語教育を考慮に入れなければならない。

言語運用には文法の知識は不可欠であるが、命令文は単なる命令を表すというような単純化した一律な知識ではなく、次の例のように、提案、脅迫、指示、案内、警告、招待を表す場合があるので、状況や場面に基づいた機能的な知識が必要である。

- (8) Find a seat and I'll get the drinks. (suggestion)
 - (9) Do that and I'll knock your teeth in. (threat)
 - (10) Connect the hose to the water supply. (instruction)
 - (11) Turn left at the traffic-lights and take the third turning on the left. (direction)
 - (12) Watch your glass. (warning)
 - (13) Have a drink. (invitation)
- また、命令は命令文によってのみ伝達されるのではなく、次の例のように他の構文によっても命令的な意味を相手に伝えることができるということも習得させるべきである。
- (14) If you don't shut the window, you'll get a good hiding.
 - (15) I insist that you do it.
 - (16) You pay the bill.
 - (17) You're not going out in that dress.
 - (18) My husband will carry your bag for you.

以上、階級間にみられる異質な英語を始め、地域社会に特有な訛りのある発音や方言、国家間にみられる様々な英語の発音や語彙上の差異、また個人語にみられる場面や状況に応じた表現や code switching, 更に一般にサピア・ウォーフの仮説の呼称で知られている言語相対性の原理まで、種々の例文を通して言語の変動を考察してきた。前述したように、第二言語習得においても核心文法を中心とした言語習得装置(LAD)が作用し、認知的・知覚的発達過程に言語経験と社会経験が加わって伝達能力が習得されるとすれば、言語的、社会的な環境のもとで、LADが活性化して多様な言語運用がもたらされることになる。このようなメカニズムの主な要因となるのは、対象言語に接する期間、職種、居住地、母語、社会的関係と交流、動機づけ、年齢、教育、等であ

る。これらの因子が組み合わさって多種、多様な言語表現が誘引されると思われる。

参考文献

- Alexander, H. 1962. *The Story of Our Language*. Thomas Nelson & Sons.
- Booth, A. 1988. *The Story of English*, Macmillan Language House. (original text, BBC Publications. 1986)
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton.
- 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press. 安井 稔訳「文法理論の諸相」研究社 1970.
- Crystal, D. 2004. *The Stories of English*. Penguin Books.
- 樋上 勲 2005「言語能力から伝達能力へ——第二言語習得をめぐる——」大阪明浄女子短期大学紀要 第19号
- Hughes, A. & Trudgill, P. 1979. *English Accents and Dialects*. Edward Arnold.
- Joos, M. 1961. *The Five Clocks*. Harcourt, Brace & World, Inc.
- Leech, G. 1974. *Semantics*. Penguin.
- Moss, N. 1973. *What's the difference? An American/*
- British · British/American Dictionary*. Hutchinson Co.
- Mufwene, S. S. 1994. Theoretical Linguistics and Variation Analysis: Strange Bedfellows?, in *Papers from the 30th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*.
- Richards, J. C. 1971. Error Analysis and Second Language Strategies, in *Focus on the Learner: Pragmatic Perspectives for the Language Teacher*, ed. by J. W. Oller and J. C. Richards. Newbury House Publishers, Ind. 1973.
- Sapir, E. 1929. The Status of Linguistics as a Science, in *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture, and Personality*, ed. by D. G. Mandelbaum. University of California Press. 1949.
- Trudgill, P. 1974. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Penguin Books.
- Wakelin, M. F. 1977. *English Dialects: An Introduction*. The Athlone Press of the University of London.
- Wilkins, D. A. 1972. *Linguistics in Language Teaching*. Edward Arnold.
- Whorf, B. L. 1956. *Language, Thought, and Reality*. The MIT Press.